



口 絵 駿河町三井組ハウスの鯨（今井町邸内に移築後）

駿河町三井組ハウスは、明治七年（一八七四）に竣工した三階建ての擬洋風建築で、三井組や三井銀行の本拠地として利用された。第一国立銀行などとともに錦絵や絵画の題材にもなり、東京の名所の一つとして知られていた。

駿河町三井組ハウスの頭頂部には、一頭の鯨が据えられていた。青銅製で、高さ約一七一cm、底部幅約三八cm、長さ約八三・六cmあった。竣工当時、鯨と富士山をセットにした絵も配布されたようで、駿河町のシンボルであった富士山と対をなす象徴的存在として位置づけられていたものといえる。

明治二十九年（一八九六）、駿河町に地上四階建て・鉄筋構造の三井本館の建設が始まる。これにともない駿河町三井組ハウスは解体されたが、時期・経緯不明ながら、門牆と鯨は麻布今井町にあった三井北家の邸内に移築された。

口絵に掲載した画像は、昭和十二年（一九三七）四月十四日に今井町邸で催された、雛祭り茶会の映像の一部である。屋外のレセプション会場の様子を撮影したシーンから、鯨の全景と顔付近をアップにした箇所を切り出してきた。上画像の背景に見える建物は、庭にあった温室である。鯨は温室を巡らせる生垣の一角に置かれていたようだ。

下画像の背景に、屋外に机を出し大勢の人が集まっている様子が見える。今井町邸は、国内外の賓客などを招いたレセプション会場として、たびたび利用されていた。昭和戦前期の記録映像が若干残っており、招待客の容姿だけでなく、屋内での食事の提供、美術品の展示、庭園開放、庭に天幕を張っての軽食・飲み物の提供などの様子が映されている。北家・今井町邸の社交的な役割を垣間見られよう。

今井町邸は戦時中に空襲で被災し、戦後は北家の手を離れた。近代三井の黎明から三井財閥の終焉までを見届けたであろう鯨が、これらの混乱の中でどうなったのか。現時点では不明である。

（下向井紀彦）